

人々とのつながりについては、また改めて論じることにしたい。

引用文献

Department of Census & Statistics, Ministry of

Policy Planning and Economic Affairs. 2015. Census of Population and Housing 2012. <<http://www.statistics.gov.lk/pophousat/cph2011/pages/activities/reports/finalreport/finalreporte.pdf>> (2022年5月16日)

世代を超えて継承された相互扶助「結」

—世界遺産白川郷における人々の語りに着目して—

奥田真由*

深々と雪が降り積もる2021年1月19日、筆者は岐阜県大野郡白川村荻町を訪れた。前日の大雪により路側帯には雪が高く積み上げられ、時刻は午後7時前であったがあたりは暗く静まりかえっていた。

白川村荻町は「白川郷」という名で知られている一大観光地であり、その名前を聞けば大きな合掌造り家屋を思い浮かべる人も多いであろう。白川村は岐阜県の北西部に位置しており、庄川流域に集落は点在している。荻町はちょうどその中間に位置する集落である。一般的に白川郷と呼ばれるのは白川村のなかでも荻町のことであり、地域住民は観光業に従事あるいは関係している者がほとんどである。荻町では1965年前後から観光客が徐々に増加し、その後合掌造り家屋の民宿や飲食店、土産物屋は増加し現在に至る。新型

コロナウイルスによる影響を受ける前の2019年、荻町では過去最高の観光客数である約215万人を記録した。

筆者は荻町でのフィールドワークを通して人々の生活空間、つまり居住環境ともいえる合掌造り家屋がそのまま観光資源となった過



写真1 荻町区一望風景

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

程での葛藤や、観光地化していく激動のなかで生まれた住民間の軋轢を人々の語りから垣間見ることができた。筆者は調査をはじめた9日目の1月27日、偶然にも多種多様な背景と経験をもつ3人の荻町住民と出会った。その日得た彼らの語りから、白川郷の「守り受け継いできた伝統」といった美しい幻想のなかにある、人々の内情を見出していきたい。



写真2 荻町区にある数少ない共有茅場

若手茅葺き職人による語りから

その日筆者は交流のあった白川村役場の人より若手茅葺き職人を紹介してもらい、荻町のはずれにある作業場兼倉庫の場所を教してもらった。午前10時頃、筆者はやや緊張した面持ちでその場を訪れた。作業場にはさまざまな道具類と茅が積み上げられ、3人の茅葺き職人が筆者を迎え入れてくれた。筆者はそのなかでK氏（当時36歳）に詳しく話を伺うことができた。

K氏は荻町に生まれ、茅葺き職人となる前は白川村内の建設業者で働いていた。しかしK氏には「白川でカヤを作りたい」という積年の思いがあり、茅葺き職人となったのである。というのも現在白川村では、年間消費量の約2割ほどしか茅の自給ができておらず、その他8割程度はほぼ静岡県の茅生産業者から購入したものを使用している状況である。以前荻町では、どの家庭でも茅場を所有し茅頼母子講というものを組むことで茅を融通させていた。つまり集落環境のなかに茅場が当たり前のように存在し、生活サイクルの

なかに茅刈りなどの作業が組み込まれていたのである。K氏には以前のような集落環境を再生させ、白川の茅で屋根を葺いていきたいという思いがあった。K氏の語りからは先代から受け継いだものへの畏敬の念と、世界遺産地としての集落環境維持への責任が感じられた。

さらにK氏は後世に伝えていくべきもののなかに、相互扶助「結」¹⁾を挙げた。白川村では現在、合掌家屋の屋根の葺き替え時にのみ、「結」が見受けられる。荻町では年に3棟ほどの合掌造り家屋が「結」で葺き替えられているが、家屋によってその規模は異なり、大きいものであると荻町中さらには白川村内から人が集められる。K氏の語りのなかでは、「結は自分たちの代で絶やしてはならない」という言葉があった。K氏のなかには、「結」というものが純然たる相互扶助として存在しているのではなく、後世へ受け継いでいくべき「伝統」として存在していたの

1) 恩田守雄 [2015: 63] によれば、ユイは日本村落各地にみられた互助慣行のひとつであり労働力を交換する「互酬的行為」であるとされている。

である。つまり「結」は、人と人との助け合いのためという美しいものではなく、絶やすことのできない人々の繋がりへと変貌していったのである。

そして筆者はK氏に、「昔のことが聞きたかったら白川の生き字引を紹介するよ」と言われ、2人目の地域住民のもとへ案内された。

「生き字引」と呼ばれた老人の語りから

「生き字引」として紹介されたのは、生まれてから現在まで荻町に居住するF氏（当時87歳）である。筆者は荻町のちょうど中間あたりに位置する平屋へ案内されると、家のなかにはF氏ひとりだけであった。F氏は最初、得体の知れないよそ者である筆者を訝しげに見る様子であったが、とにかく荻町のことなんでも知りたいんだと伝えると嬉しそうに、そしてなつかしげに語りはじめた。F氏は「白川の昔を知っている者はもう自分以外いない。みんなもう死んでしまったからな」と言った。

まずF氏の背景に着目すると、若い頃は郵便局員として勤務した後、荻町区内の合掌造り家屋で4年ほど前まで土産物屋を営んでいた。現在はそちらを身内に譲り、自身は非合掌造り家屋に居住しながら自由気ままに老後生活を送っている。若い頃は合掌造り家屋の葺き替え時に現在の茅葺き職人のようになりーダー的立場で指揮を執ったり、観光地化に向けて周囲を先導したりと荻町の自治に積極的に関わってきた人物である。

F氏の語りのなかでは「結」に関して、「至極当たり前のもので体のなかにあるもの」

といった表現がなされた。F氏にとっての「結」は、生活の一部にある「当たり前のもの」として存在していたのである。しかし同時にF氏は、荻町の住民間で観光地化とともに「結」に関する認識にズレが生じてきたこと、それとともに生まれた軋轢について語った。

F氏によれば荻町が1976年に重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建とする）に選定される前、合掌造り家屋保有者と非合掌造り保有者の間で軋轢が生まれたという。それは合掌造り家屋を保有しているか保有していないかによって、重伝建選定により受けるメリットに差があることによるものであった。つまり非保有者にとっては、重伝建選定による利点はないにもかかわらず、住居の改築や居住環境の改修における制約が課されはじめたという。非保有者にとってはむしろ煩わしいものでしかないと思われていた。F氏より少し若い世代の合掌家屋非保有者の間では、「結」を行なうとなっても「なんで自分たちも行かなきゃいけないんだ」といった不満が生まれていたのである。制約は増える一方で自分たちには何も利益がなく、その恩恵を受ける保有者のために「結」を行なわねばならないというのは確かに大変なことである。しかしF氏は当時、「結」を執り仕切る立場にあり、観光地化を推し進めるべきといった意見をもつ自分のもとの、そのような声は届かなかったとも語った。

しかしその後、重伝建選定の影響により次第に観光客が増加しはじめ、その恩恵は非保有者の間にも共有されることとなったのであ

る。F氏によると、この頃から荻町内で観光客を相手にしたお店が急増し、「荻町がどんどん移り変わっていき楽しかった」と語った。

F氏によると、荻町住民の間で「結」に対する認識は3段階に分かれているという。自身の世代は「当たり前」のものとして「結」が染みついており、F氏自身より少し若い世代、つまり現在の60～70代に至っては「なぜ自分も」といった考えを経験していると語る。さらにその下の世代になると「守るべきもの」といった認識しかないのではないかとF氏は語る。この最も下の世代における認識は、確かに1人目のK氏の語りからも同様にうかがえたものである。

筆者はそこで、F氏自身は合掌家屋非所有者であるが「結」に行くことに疑問を感じたことはないのかと尋ねた。するとF氏は自身の経験を語ってくれた。

F氏がいつものように「結」で屋根を葺いていたある時、後ろを振り返ると自分のあとに付いてきてくれている人がいないことに気づいたという。そこでF氏は「結」が途絶えることに対して何ともいえない感情が湧いたそうだ。さらに、「あの頃は茅はたくさんあったが、自分に付いてきてくれる人は減ってしまっていた。だけど今は茅はないが、みんな『結』を守ろうとしている」と語った。

F氏は現在の「結」への認識が自分たちの世代とはだいぶかけ離れており美しいものとして捉えられ始めていることももちろん理解している。しかしそのうえでK氏のような若手茅葺き職人により従来の「結」としての葺き替え方法が守られ受け継がれていること

に、誇りを感じていることも事実なのである。

そしてF氏はその場で荻町でも最大級の合掌造り家屋の所有者に連絡を取り継いでくれ、そのまま伺うこととなった。

荻町最大級の合掌家屋当主の語りから

そういった経緯で筆者が訪れたのは、F氏の平屋から徒歩3分程度にある、O家である。O家の合掌造り家屋は5階建てであり遠目からでもその規模の大きさがわかるほどだ。O家は普段観光施設として開放されており、なかの様子を見ることができる。昔の白川村における季節ごとの農作業や養蚕の様子、その際に使用する用具などが展示されている。そのほか、合掌造り家屋の構造がわかりやすく展示され、その部位の説明や屋根葺きに使う道具などもある。

現在O家にはその当主と当主の母が居住



写真3 O氏居住の合掌造り家屋

している。そのため観光施設と居住スペースが一体となっている。これは荻町において特段珍しい光景ではない。その日〇家には現当主がいらっしゃり、囲炉裏のある部屋にてお話を聞くこととなった。

〇家の当主（当時60歳）は進学のため一度荻町を離れ、その後荻町に戻ってきて現在に至る。〇家は上記したように荻町のなかでも大規模な合掌造り家屋であるため、「結」を行なうとなると相当な労働力を要する。〇氏は「結」について、「今と昔で考え方も変わってきた。…（中略）…けれど『モノ』だけを残しても意味は無い。自分たちで汗かいてやらないと残していく意味がない」と語った。

さらに〇氏は、「結」で屋根葺きをすることが以前より減少したことにより、保有者と非保有者の間に隔離が生じていることについても語った。現在保有者に至っては、荻町では「合掌造り保存組合」というものが組織化され、保有者のみが組合員となり「結」を行なうときは半強制的に出役することとなっている。しかし非保有者に至ってはその義務はなく、完全に個人の付き合い等に委ねられているのである。〇氏によると、非保有者の間の葛藤として、「自分たちが半人足²⁾で行くのもどうだろうか。手伝うとその分お返しもあるから、声がかからなかったら行かない」

といったことがあるという。荻町では「結」の機会が減少していることにより技術の伝承がうまくいかず、非保有者の間で「結」へ行くことに遠慮が生まれていたのである。

つまり観光地化されていった激動の時代だけでなく現代においても、「結」にまつわる軋轢が荻町住民間で生じていたのである。

世代を超えて

このように筆者が出会った3人の荻町住民は、それぞれに「結」に対する認識が異なっていた。自身が居住している家屋によって、「結」の場での経験によって、自身の生業によって、それは三者三様となっていた。そしていつの時代でも人々の間では「結」に対しての葛藤が渦巻いている。しかしそのようななか、現代では皆一様に「結」の存続を願っている。「結」が純粹な人々の助け合いである相互扶助を指しておらずとも、「結」を次世代へ繋げていかねばならない、「結」を絶やしてはならないと人々は語る。「結」はいつの時代も人々の心を強く揺さぶり、しかしその一方で拠り所として存在しているのかもしれない。

引用文献

恩田守雄. 2015. 「東アジアの互助社会—日本と韓国, 中国, 台湾との互助ネットワークの比較」『社会学部論叢』26(1): 61-97.

2) 技術が足りないこと。